三級市民ウィリアム・リウィウス

「今頃あいつは、どこにいるんだろうな？」

カイルはいつも三人で集まっていた裏通りの小道にファヴェーラと二人でいた。

「……」

ファヴェーラは心ここにあらずといった様子。カイルは苦笑するしかない。

「お前は、あいつがいないとほんとに無口だな」

「……そう？」

「そうだ」

「そう」

それきり会話もなくなる。アルとかいるとファヴェーラ、三人でいるときは会話の堪えない仲なのだが、１人欠けるとこの様子である。いや、きっとアルがいたから――

「ファヴェーラ、もしあいつが戻ってきたら……僕を止めてくれるな」

「……？」

首を傾げるファヴェーラ。カイルは眉間に皺を寄せる。

「あいつが五年間世話になった恩を、仇で返したことは理解している」

ファヴェーラが視線を外す。それを知ってから知らずか、カイルは会話を続ける。

「暗殺ギルドにお前を通して依頼して……店主とその夫人を殺害。証拠隠滅のため店ごと焼き払った。ご丁寧にアル用の死体まで用意して、な」

殺害の片棒を担いだであろうファヴェーラには目を合わせず、カイルは１人語りを続ける。ファヴェーラにとっては責められない方が居心地が悪い。

「どうりであいつにしては甘い手順だと思っていた。何が暇をもらう、だ。自分ごと全部燃やし尽くして、記憶も記録も消して、これで完全ってか！？ふざけやがって！」

憤慨するカイル。居心地の悪そうなファヴェーラ。

「お前が軍や見回り連中じゃなくてよかったよ、カイル」

今この場で絶対聞こえないはずの声が二人の耳に届いた。驚愕しながら声の方に振り向くこと。そこにいたのは――

「よう、どうした二人とも。そんな間抜け面して」

出国して、何かをしようとしていたアルの姿であった。何をするにしても、まさかこんな早く帰ってくるとは二人とも思っていなかった。

「何故、アルが、国を出たんじゃ？」

ファヴェーラでさえ、声が震えている。驚きと喜びと、いろいろな感情が揺れ動いているのだろう。それを見てアルはしてやったりとばかりににやりと笑う。

「誰が長い間を空けると言った？一時的って……言ったろ？」

ひょいと段差を越え、二人のそばに近寄る。

「いや－もう糞の海は勘弁だ。二度とあんなとこ――」

やれやれとポーズを取るアルに――

「すまんな。アル」

カイルは拳を叩き込んだ。吹き飛び用水路に落ちるアル。驚きと痛みに顔を歪める。

「何しやがる！？」

「あの人は……お前を家族のようなものだと言っていたぞ。いつか自分お店を継いでくれる跡継ぎだと。息子がいないから、お前を、お前を」

カイルは震える。アルのやったことは許されていいことではない。道義的にも、倫理的にも、当然法律的にも許されない。五年前、何も知らない、文字すら読めないアルを雇ってくれた店主。アルに知恵を与えてくれた恩人。借りは山ほどあるはずなのだ。

「ああ、良い人だったな」

アルは、口の端から流れる血を拭いながら、残念そうにつぶやいた。カイルの手が止まる。

「良い人だった」

底に公開が滲んでいれば、まだやり直せる。そこに一片の後悔があれば、罪は償える。

「とても……都合の良い人だったよ」

後悔がなければ――そこに罪の意識は芽生えない。微塵も。

「僕に知恵を授けてくれた。僕に知識を授けてくれた。僕が学ぶ場をくれた。とても良い人だ。感謝してるよ。是非、死後の世界でも幸せに生きてくれ」

カイルは、目の前の人間が、何者なのか、理解できないでいた。なんとしてでも上に往く。姉の仇を取りたい。それは分かる。それは理解できる。だが目の前の怪物はどうだ。それ以上喰らおうとしているではないか。

「僕にとっての家族はルレットねえさんだけ。僕にとっての友はお前たち二人だけ。それ以外は外側。祖霊がはどうでもいいだろう？僕の役にたつか、僕の踏み台になるか、それだけだ」

五年間で歪み、肥大したナニモノか。それはカイルの理解を超える。

「これまでも、そしてこれからも、だ」

アルは懐から羊皮紙を取り出した。それは一枚の書面。未来への切符。

「これは……三級市民の身分証。どう、やって？」

三級市民。一級から三級まであるそれは、この王都で、この国で市民権を持つという証明。そして、奴隷が一生かけても一代で手に入れることの出来ない奇跡の証。

「そーか。お前らは字が読めなかったな。これは……奪ったのさ、ルシタニアのウィリアム君からなぁ」

カイルたちは字が読めない。用紙の柄から三級市民であることは読み取れても、そこにある名前まで知ることはできないのだ。だから分からなかった。そこに書かれた文字が、アルというなではなかったことに。

「奪う、だと？それじゃあそのウィリアムという人は？」

「さあ？どこかの暗い穴の底にでもいるんじゃないか？」

まったく悪びれる様子のないアル。それどころか「どーだすごいだろ」と言わんばかりの表情。カイルは怒りも忘れてただ呆然としていた。なんと、声をかければいいのかわからない。

「身分証は細かい身体的特徴、指印などの確認事項もあるはず、詐称は難しい」

ファヴェーラは別の意味で驚いていた。偽造の証明書は幾度か見てきた。しかし、それらはかなりの確率でバレてしまうのだ。裏の中の裏でさえ、完全な市民の証明書を手に入れることは難しい。たまに闇市場に他人の証明書が出回るが、他人の証明書ではあまり意味がないし、需要もないのが実情である。

「そう、そこだよゔファヴェーラ！」

アルはまってましたとばかりにファヴェーラに視線をあわせる。

「この国の証明書は複雑で繊密、偽造は不可能、他人のでは意味がない。指印もあるからな。腐っても七王国だ。でも、他国も同じとは限らない！」

カイルはのろのろとアルの方を見る。

「僕は輸入本屋で勤めた経験から、多くの証明書を見てきた」

嬉々として種明かしに勤しむアル。

「どの国も証明書はあるが、どれひつと取っても同じではない。アルカディアより複雑なものもあれば……簡素なものもある。そして、ルシタニアはその中でもかなり簡素な方だ。名前、住所、その国の証明印、性別、年齢、その国での身分、たったそれだけ。そして、それらは……そいつに成り代わる者にとっては何ら障害にもならん」

この国の人間では思いつかない方法。他国の身分証など、そういう商売に精通するもの以外見ることはないのだ。アルはそれを知っていた、だから出来た。

「ルシタニアは山岳国家。幾つもの集落の集合体。地位の格差は少なく、そもそも多くはその集落で生まれ死んでいく。対外的に証明書はあるが、重要度は低い。だからザルなんだよ。穴だらけ、だ」

アルは舌なめずりをした。いくつかのリストアップしていた候補の中で、ルシタニアは最有力候補の一つであった。それを同じ年頃の、アルからすれば無防備な鴨がやってきたのだ。面食らうし、やさしくもうるというもの。

「ただ、正門をくぐるときはなかなか緊張したぞ。何か抜かりがあればその場で終わり、まあ死ぬだろうからな。だが、くぐってこの三級市民権証明書、別名在留外国人証明書と交換すれば、その心配も杞憂に終わる。これで、僕はスタートラインに立った！」

ファヴェーラは無表情で拍手していた。

アルは確かに偉業を為した。奴隷では絶対届かぬものを手に掴んだのだ。

「アル、お前は間違っている」

しかしその奇跡は、人の屍の上に為ったもの。

「カイル、さっきからどうしたんだよ？外側の人間なんて気にするな。いくら心だって他人は他人さ」

ファヴェーラがうんうんと頷いた。ファヴェーラはどちらかといえばアルと同じ意見。線引は明確に、それ以外はどうなっても構わないと思っている。

カイルがきっと睨みつけ、ファヴェーラはしゅんとなった。

「なあおい。こういうことはいいたくないんだけどさ。お前も剣闘士なら人の一人や二人、殺したことあるだろ？ファヴェーラだて盗賊なんだ。それくらいの経験はあるさ。なのになんで僕だけ責められる？矛盾していると思わないかい？」

カイルは目を伏せる。そら見たことかとアルは「ふふん」と鼻を鳴らした。

「……ああ、そうだな。いくら仕事でも、それはきっと許されることじゃない。いつか、僕は報いを受けるだろうし、ファヴェーラもそうだろう。因果応報、そいうものだ」

アルはゾクリと、肌が粟立つ感覚を覚えた。カイルの雰囲気が一変していた。

「だが、お前だけはこの中居に入ってきてほしくなかった。せっかく解放奴隷になれたんだ。お前は自由で、本屋の跡継ぎで、そうやって真っ当に生きていて欲しかった！」

カイルは、腰の剣に手を伸ばした。ア社から、刀身が見えた瞬間、殺気が溢れる。

「今からでも遅くない。罪を食いながら真っ当に生きる。僕は止めるのがおそすぎた。だがまだ間に合う。その証明書は……これからを真っ当に生きるために使え」

今からでも引き返してほしい。もう、法的に罪を悔い改めることはできない。どう転んでも死罪しか存在しないから。だからカイルも底まで無茶は言わない。しかしせめて、せめて心の部分くらいは、

「冗談、ようやく始まったんだ。僕はこれからも手段を選ばない！。遠回りなど一切せず、多くを踏みつけて這い上がってやる！」

それを聞いて、カイルは剣を抜き放った。性根を叩き伏せる、時には力の行使も辞さない。それが友情である。

あるは震える。稽古を付けて貰ったときは、まるで違う雰囲気。死神をアルは見たことないが、今のカイルはそれと比する。

「なら、僕が止めるまでだ。これは刃引きしてある。死にはしないが……痛いぞ」

「止めてカイル。私達が争う理由なんてない」

ファヴェーラが止めようとする。

「いいさファヴェーラ。ちょっとむかついてたところだ。いつも偉そうに僕に説教して……いつまで兄貴分のつもりだよ！」

しかしそれを制し、アルも剣を抜き放った。それはウィリアムの父が作成したルシタニアの剣。この国では滅多に見ることの出来ない珠玉の一品。

「いい剣だな。それも奪ったのか？」

「ああ、ウィリアム君の置き土産さ。こいつは刃引きしてないぜ、カイル！」

脅かしたつもりのアル。

「だから？」

平然と『高所』から見下される感覚、押しつぶされそうな、すり潰されそうな感覚がアルを襲う。かづくがこれほど似合う男はいない。そして、経験値もアルの比ではない。これが、カイルという男の力。

「死んでも、知らねーぞ！」

アルは剣を振り上げて飛びかかる。本に埋もれていたにしてはかなりシャープな動き。合理的かつ繊密にて繊細。アルの正確を現していた。だが、

「安心しろ。……お前じゃ僕を殺せない」

カイルは、アルの反応速度をはるかに超える速度で――

「が、はっ！？」

剣の腹をアルに叩きつけた。たった一撃、しかしカイルの一撃は単純な膂力の桁が違う。技術云々をねじ伏せて、アルは壁に叩きつけられた。そもそもその技術すらカイルのほうが上。

「諦めろ。お前はまだ引き返せる」

「だ、まれぇぇぇぇえええええ！」

アルは起き上がって再度立ち向かう。自分は優秀である。自分は上に立てる。

「無駄だ」

その確信が、妄信が崩れ去る。

カイルは立ち向かってくるたびに、用者なく叩き伏せた。力の差を見せつけるように剣の腹で殴りつける。腕力的にも技術的にも難しい手加減。それでもアルは届かない。ファヴェーラがとめようとしても、カイルもアルも止まらない。

「もう、やめて」

ファヴェーラは泣いていた。表情は変わらない。それでも、瞳から涙がこぼれ落ちる。

「そろそろ、諦めたらどうだ。ファヴェーラも泣いている。僕達はお前に幸せになってほしいんだ。真っ当に生きてほしいんだ。分かってくれよ、親友」

カイルも泣きそうな表情であった。倒れ伏せるアルを見下ろしながら、その目は憐憫に揺れている。

「ふ、ざ、けるな」

それでも、アルは立ち上がり、剣を向ける。

「幸せになる？真っ当に生きる？ふざけるなふざけるなふざけるなぁ！」

アルの咆哮、心の底からの叫び。

剣を振り上げ、カイルに突貫。咄嗟のことでカイルも受けるしかない。

鍔迫り合う二人。

「先に奪ったのはどいつだ！？僕から奪ったのは誰だよ！？そいうが野放しにされて、僕が我慢しなきゃいけない理由がどこにある！？殺さなきゃいけなんだ。ねえさんを殺したやつ、それに組したやつ、それを許したこの社会全部！この世のどこに幸せがある！？お前が姉さんを蘇らせてくれるのか？カイルっ！」

駄々をこねるようにがむしゃらに打ち込む。あの比から封じ込めてきた感情が炸裂していた。

カイルは――受けるしかない。受け止めることしかできない。突き放し、剣の腹で叩く。技量的に可能だが、友人として今のアルをそうすることはできなかった。

「出来ないなら、僕を止めるなよ。僕の人生を否定しないでおくれよぉ。僕にはもう、二人しかいないんだ。その二人が、ねえさんを知っている友達が……否定しないでおくれよぉ」

泣き喚くアル。まるで五年前に戻ったかのような光景。こどもが、そこにいた。

「アル、お前」

ようやく、カイルはアルの底を見ることが出来た。それは混じりっ気なしの復讐心。肥大したそれは、何もかもを飲み込み、アルの人生そのものになった。もはやそれは復讐心ですらないのかもしれない。

「否定するなら殺せよ。殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せぇ！」

シンプルゆえにどうしようもない。アルにとって姉はすべてだった。ほんのすこしだけ、自分たちはその内側にいただけ。アルのほとんどが姉であった以上、それの裏返しがこうなっても仕方ない。

「アルを殺すなら、私は貴方を許さない」

ファヴェーラもどこからか短剣を取り出しカイルに向ける。

「私達は友達……違うの？」

ファヴェーラの言葉に、カイルは剣を下ろすしかなくなった。何を言っても揺らがない。殺さなければ、止まらない。そしてカイルは、友達を殺せない。

「アル、僕は認めない。だが、僕にお前は止められない」

カイルは剣を納める。雰囲気はいつものカイルだった。諦めにモ似たその表情は、今何を思うのか。

それを見てアルはほっとしたような表情。

「カイルに認めてもらえるように頑張るよ。だって僕らは友達だもんね」

アルの言葉はどうしようもなくズレている。分かっていても、お互いがお互いのズレをどうすることも出来ない。アルは死んでも曲がらない。カイルは親友を殺せない。そして二人はどうしようもなく友達なのだ。

「それで、これからどうするんだ？」

カイルの言葉に、アルは顔を輝かせた。剣を納め、カイルに向き直る。

「そうだね。いや、そうだな……まずやっぱり出世するなら戦争に行かなきゃ。そのための三級市民だ。軍に志願して、最前線のち方に飛ばされる。そこで功を積み上げて、なんとかここで成り上がるための足がかりを得る」

アルは寂しそうに二人を見る。最前線の地域に行くならば、しばらく帰ってくることは出来ないだろう。戦況次第では、数年は戻れないかもしれない。

「そうか、俺から言えるのは、死ぬな、生きろとしか言えん」

「ガバってね、アル。私達は此処で待っているから」

「ありがとうふたりとも。頑張るよ」

三人は親友である。しかし、親友が全て分かり合えているとは限らない。分かっていたとしても、どうしようもないことはある。

「あとなアル。さっきの剣。悪くなかったぞ」

カイルの言葉にバツが悪そうな顔のアル。

「余裕でボコボコにしたくせに」

ふてくされた表情のアルに、カイルは手を頭に置いてぐしゃぐしゃかき回した。

「俺が強いんだ。これでも闘技場じゃあちょっとしたもんなんだよ、やせっぽっち君」

「やめろ！離せ！」

「がはは、やなこった」

「……ふふ」

「「ファヴェーラが笑った！？」」

いつもの三人に戻る。それが薄氷の上であることは、三人も了承している。それでお、薄氷だからこそ、三人はそれを大事にしたいと願うのだ。それが永遠でないと彼らは知る故に――

「とりあえず、死ぬなよアル」

「わかってるさ、カイル」

アルは旅立つ。上に這い上がるために。

此処がすべての分岐点、アルを泊められるとすれば、ここしかなかった。カイルは後に後悔する。あの時、手足を断ち切ってでも止めて置けばよかったと。否、もっと前、アルが業を背負う前に止めていれば――

しかして歴史にIFはない。

アルは進む。その道が血まみれていようとも、立ち止まることはない。